

カラー版 古典の花

万葉花譜

春・夏

文／松田 修・写真／田中真知郎



松田 修 (まつだ・おさむ)

一九〇三年、山形県に生れる。東京大学農学部卒業。社団法人「日本植物友の会」会長。専攻は植物文化史。著書に『万葉植物新考』『植物の旅』『植物と伝説』『花と文学』『花ごよみ』『植物世相史』『花の文化史』『古典植物辞典』『秋の百花譜』『冬の草木譜』など多数がある。

現住所／東京都世田谷区砧二一七一

田中真知郎 (たなか・まちお)

一九二六年、大阪府に生れる。朝日新聞大阪本社出版局写真部員を経て、現在は朝日新聞フォトサービスキヤク。

著書に『阿波の木偶』『花の大和路』

『歌の大和路』『石仏の大和路』『大和路』『かんのんみち』『大和路かくれ寺かくれ仏』などがある。

現住所／奈良市学園町南一一一一九

カラー版 古典の花
万葉花譜 春・夏

昭和五十七年二月二十七日発行
昭和五十八年八月一日 二刷

著者 松田 修 ©
田中真知郎 ©

発行人 石原明太郎

発行所 (株)国際情報社

発売元 (有)光書房

〒150 東京都渋谷区東一―二八―六
電話〇三(四〇七)六一四六
振替 東京五一三六五四八

印刷所 (株)国光印刷

定価 一六〇〇円

© OSAMU MATSUDA 1982
MACHIO TANAKA printed in Japan

カラー版 古典の花

万鑿花譜

春・夏

文・松田 修
写真・田中真知郎

国際情報社

カラー版 古典の花

万葉花譜 春・夏 — 目次 —

春

わらび

やまぶき

はねず

45

あしび

さくら

なし

46

やなぎ

すみれ

すもも

49

さきくさ

かたかご

しきみ

51

かはやなぎ

ねつこぐさ

ふぢ

52

やまたづ

うはぎ

ゑぐ

54

うめ

よもぎ

むぎ

55

もも

ひる

ほほがしは

56

つばき

せり

つつじ

ちがや

夏

うのはな

58

ゆり

86

すげ

107

万葉植物名一覧表	4
万葉の風土と万葉植物の分布	121
万葉植物と万葉人の生活	126
万葉時代の色彩と染料植物	131
万葉植物と民俗	136
索引	142

あふち	60	ひめゆり	88	むらさき	109
ちさ	62	つちはり	90	たちばな	111
あぢさゐ	64	あかね	91	みら	112
からたち	66	くれなる	92	うり	113
うまら	69	わすれぐさ	94	あさ	114
つた	70	まめ	96	なつめ	114
つみ	72	かほばな	97	あをな	115
つづら	73	いはるづら	98	くは	115
たく	75	しだくさ	99	ところづら	116
ねぶ	76	はちす	100	しりくさ	117
あやめぐさ	78	おほろぐさ	102	はまゆふ	118
かきつばた	80	ひし	103	たはみづら	120
ぬばたま	83	ぬなは	104	なぎ	120
つきくさ	85	くそかづら	107		

万葉植物名一覽表

草本類

あか	あかね(アカネ)	かほ	ばな(ヒルガオ)	つき	くさ(ツユクサ)	み	ら(ニラ)
あき	のか(マツタケ)	から	ある(ケイトウ)	つち	はり(メハジキ)	み	る(ミル)
あ	さ(アサ)	きく	わく(フユアオイ)	つづ	ら(ツツラフジ)	む	ぎ(オオムギ)
あさ	がほ(キキョウ)	きみ	・きび(キビ)	ところ	づら(トコロ)	む	ぐ(カナムグラ)
あざ	さ(アササ)	くく	たち(カブラナの若苗)	な	ぎ(ミスアオイ)	む	し(カラムシ)
あ	し(アシ)	く	ず(クズ)	な	でしこ(ナデシコ)	むら	さき(ムラサキ)
あし	つき(アシツキノリ)	く	そかづら(ヘクソカズラ)	な	のりそ(ホンダワラ)	め	(海藻類の総称)
あ	は(アワ)	くれ	なる(ヘニバナ)	な	はのり(未詳)	も	(藻類の総称)
あふ	ひ(フユアオイ)	こ	け(コケ類の総称)	に	こぐさ(未詳)	もも	よぐさ(未詳)
あやめ	ぐさ(シヨウブ)	こ	な(コナギ)	ぬ	な(ジュンサイ)	やま	ある(ヤマアイ)
あを	な(カブラ)	こ	も(マコモ)	ぬ	ばたま(ヒオオギ)	やま	すげ(ジャノヒゲその他)
あを	みづら(未詳)	さ	はあら(サワヒヨドリ)	ね	つこぐさ(オキナグサ)	ゆ	り(ヤマユリ)
い	ち(ヒガンバナ)	し	だく(ノキシノブ)	は	ぎ(ハギ)	よ	も(ヨモギ)
い	ね(イネ)	し	ば(シバ類の総称)	は	ち(ハス)	らん	けい(東洋ランの総称)
いは	るづら(スベリヒユ)	し	りく(サシカクイ)	は	なかつみ(マコモ)	わ	かめ(ワカメ)
う	けら(オケラ)	す	げ(スゲ類の総称)	は	まゆふ(ハマユウ)	わ	すれ(ヤブカンゾウ)
う	は(ヨメナ)	す	す(ススキ)	ひ	え(ノビエ)	わ	ら(ワラビ)
う	も(サトイモ)	す	み(スマイレ)	ひ	か(ヒカゲノカズラ)	ゑ	ぐ(クログワイ)
う	り(マクワウリ)	せ	り(セリ)	ひ	し(ヒシ)	を	ぎ(オギ)
おほ	るぐさ(フトイ)	た	で(ヤナギタデ)	ひ	め(ヒメユリ)	を	みな(オミナエシ)
おも	ひぐさ(ナンバンギセル)	た	は(ヒルムシロ)	ひ	る(ノビル)		

かきつばた(カキツバタ)
かたかご(カタクリ)

たまかづら(蔓草類の総称)
ちがや(チガヤ)

ふぢばかま(フジバカマ)
まめ(ノマメ)

木 本 類

あしび(アセビ)
あぢさゐ(アジサイ)
あづさ(ヨクソミネバリ)
あふち(センダン)
あへたぢば(クネンボ)
いちひ(イチイカシ)
うのはな(ウツギ)
うまら(ノイバラ)
うめ(ウメ)
え(エノキ)
おみのき(モミ)
かし(カシ類の総称)
かづのき(ヌルデ)
かつら(カツラ)
かには(サクラの皮)
かはやなぎ(ネコヤナギ)
かはらふぢ(ジャケツイバラ)
かへ(コノテガシワ)
かへるで(カエデの類)

からたち(カラタチ)
くは(クワ)
くり(クリ)
ごどう(アオギリ)
こなら(コナラ)
このてがし(未詳)
さうじゆ(サラソウジュ)
さかき(サカキ)
さきくさ(ミツマタ)
さくら(サクラ)
さねかづら(サネカスラ)
しきみ(シキミ)
しひ(シイ)
しらかし(シラカシ)
すぎ(スキ)
すもも(スモモ)
たぐ(コウソ)
たちばな(ミカン)
たまはき(コウヤボウキ)
ちさ(エコノキ)

ちち(イヌヒワ)
つがのき(ツガノキ)
つき(ケヤキ)
つげ(ツゲ)
つた(テイカカスラ)
つじ(ツツジ)
つばき(ツバキ)
つま(タフノキ)
つみ(クワ)
つるばみ(クヌギ)
なし(ナシ)
なつめ(ナツメ)
なら(ナラ)
れ(ニレ)
ねぶ(ネムノキ)
はじ(ヤマハセ)
はね(ニワウメ)
はそ(コナラ)
はり(ハンノキ)
ひ(ヒノキ)

ひさぎ(アカメカシワ)
ふぢ(フジ)
ほがし(ホオノキ)
ほよ(ヤドリギ)
まき(スキ)
まつ(マツ)
まゆみ(マユミ)
みながし(カクレミノ)
むろのき(ネス)
もも(モモ)
やなぎ(ヤナギ)
やまたばな(ヤフコウジ)
やまたづ(ニワトコ)
やまちさ(エコノキ)
やまぶき(ヤマフキ)
ゆづる(ユスリハ)

竹・笹の類

たけ(タケ類の総称)

ささ(ササ類の総称)

しの(ネササの類)

すず(スズタケ)

はじめに

『万葉花譜』は、万葉集に現れた花の面影を辿りながら、万葉人はこれらの花をどう観察し、またこれらの花は万葉人の生活や文化、民俗、恋などどう結ばれているかを例歌をあげて解説し、見て楽しく、読んで楽しい万葉の花を再現してみようという試みである。

私は生涯をかけた万葉の花の解説を担当し、大和の歴史的風土を背景にたのしくも美しい花の写真を撮ってくださったのは、奈良在住の写真家、田中真知郎氏である。

その前に、『万葉集』というものをもう一度ふりかえってみたい。それを念頭においてこの『万葉花譜』を読めば、一層万葉人の思いも、万葉の花も鮮明に思い浮ぶことだろう。

『万葉集』はご承知のように、日本最古の一大歌集で、全二十巻、そこに載せられている歌は、長歌、短歌、旋頭歌^{せとうか}合わせて約四千五百首を数え、作者も各階層にわたり、地域も全国に及び、古い歌では仁徳天皇^{にんとう}（四世紀）の歌から、年代の下ったものでは淳仁天皇^{じゅんにん}の天平宝字三年^{へいふしょうし}（七五九）までの歌を取めているという膨大な歌集で、これらの歌には現代でも直接こだましてくるほどの若々しい精神の息吹がある。『万葉集』が日本文学の最大の古典として読み継がれているのもそのためであろう。

万葉の花

『万葉集』はこのように日本に残された民族の遺産、最古の古典として人びとに愛されているばかりでなく、徳川以降はいろいろな人によって研究され、今日は万葉学というまでに発展しているが、これらの研究の中で一番未開拓の分野は植物部門であった。それは万葉学からいえば傍系の研究ということもあるが、また植物は万葉学者にとっては畑違いで重荷であったからかも知れない。

しかし『万葉集』の歌を分析してみると「茜さす」といった枕詞^{まくらことば}などを入れてのことであるが『万葉集』約四千五百首の約三分の一、千五百四十八首は花や植物を詠み、あるいはこれと何等か関係のある歌で、『万葉集』はまさに花でかざられた一大国民歌集であるともいえるし、また、これらの花は、万葉人がうるわしい自然の中に肌身で知った花であり、その花と一体になって生きてきた上代人の生活詩ともいえるもので、万葉の花や植物

への研究と興味は、ここにあるといつてよい。

万葉の花の作家

こういう花で生活詩を作りあげている万葉の作家にはどういふ人びとがあつたか。万葉学者の研究によると、万葉の作家はおよそ五百二十―五百三十人と推定している。これらの作家は、便宜上、第一期から第四期まで分けられるもので第一期は抒情詩の開花時代で、これに属する作家はおよそ三十人、その中で額田王、但馬皇女、石川郎女などがこの期の代表的作家である。第二期は奈良遷都から和銅三年までで約九十人の作家がまとめられ、柿本人麻呂、高市黒人、長忌寸意吉麻呂がこの期の代表作家に数えられる。第三期は奈良遷都から天平五年までで、百三十人くらいの作家群があり、大伴旅人、山上憶良、山部赤人、高橋虫麻呂、坂上郎女などが代表的歌人で、第四期の爛熟期は二十七人くらいの作家があるが、この期の代表的作家は大伴家持があげられる。

以上のような人びとが『万葉集』を代表する作家で、作家群の半数二百人は、花や植物を詠んでいる作家で、この『万葉花譜』にもしばしばその名が現れている。しかし植物や花を詠んでいる作家は、これらの有名人だけではない。無名の作家も数が多い。無名の作家には第一に農耕者、次いで海人、防人などがある。これは後世の歌集が貴紳の玩弄物となつているのに対して、『万葉集』は民衆性が強いということで、それだけ大衆の素朴な生の声が聞えてくるのである。それなら『万葉集』にはどんな花が詠まれているか。

それは巻頭にあげた「万葉植物名一覧」に示すとおりで、およそ百六十種の植物や花が数えられる。これらの植物や花を並べみると野の花、山の花、海辺の花、路傍の花、庭園の花とその取材の範囲が広く、花の数からいっても『古今集』以後を圧倒している。のみならず、これらの植物や花は、日本民族がはじめてじかに当時の国土に存在する植物を知り、それを明示したというところに注目する必要がある。

総じていえることは、これらの植物は身近な植物群で、人びとはこれらの植物群で構成している自然に安住を求めていたのであろう。

しかし、万葉人の自然に対する態度は、前時代のすべて自然現象に神を見、咲く花よりは常盤木あるいは大木、巨木に神霊を感じ、咲く花、散る花みな神の子兆と信じていた時代からは一歩を進めて、万葉時代になると花の観賞という目がようやく開けた時代であつた。それを刺激したのは隋唐などとの交通によって大陸文化が輸入されたからであり、とくに花の観賞は、漢詩文による影響が大きい。

万葉人の花の観賞

これらの花の中でどんな花が万葉人の観賞の対象になったか、また万葉人に喜ばれたかという、花の愛好などは必ずしもその歌数だけでは判定できないが、試みに『万葉集』に現れた花とその歌数をみると、

ハギ（一四一）、ウメ（一一八）、タチバナ（六八）、ススキ（四六）、サクラ（四〇）、クレナ（二九）、フヂ（二七）、ナデシコ（二六）、ウノハナ（二四）、クズ（一八）、ヤマブキ（一七）、ヨミナヘシ（二四）、アシビ（一〇）、ツツジ（二〇）、ツバキ（九）といったような数字で、万葉時代は草花ではハギ、花木ではウメが第一位を占めているが、万葉時代もやや古い時代はヤマブキ、アシビ、ツツジ、ツバキの時代で、外来文化の影響を受けた奈良朝時代になるとウメ、タチバナの時代となる。

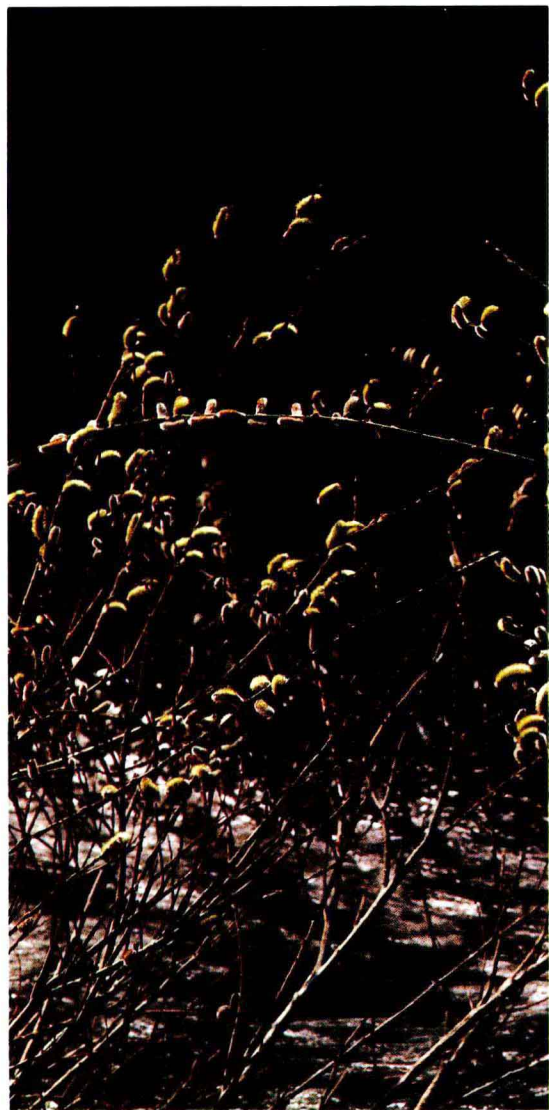
概して観賞の花は、山野の花を中心としたものであるが、この頃渡来した花にはとくに珍しさや愛玩の態度を示している。また全体として草花よりは木性の花が多い。木性の花が多いということは、これが目にとまりやすく、移植しやすく、毎年花がみられるからで、『万葉集』には「わが屋前に」とこれに移し植えてこれを眺めていた歌がたくさんある。

そして万葉人のみる目は、花は友達といった一体観で、その花に季節を知り、その花に恋の心を歌い、思いを寄せている。この寄物、寄物陳思というのはわが国特有のもので、万葉人の考えた特殊な和歌の技法といえることができる。

また万葉人の自然に対する態度も、前時代の農民的、牧歌的なものから一変して、自然の風物を凝視し、その自然の懷に自己を没入して無我の境に遊ぶという気分もみられる。

『万葉花譜』は、万葉人のこのような花に対する態度を伝えるために、万葉の花も四季に分け、季節を背景にして、第一巻には春と夏の花、第二巻には秋と冬の花をとりあげた。しかし、これが万葉の花の全部ではない。残る草木や花は、第二巻の最後にまとめて解説し、『万葉集』に出てくる草木や花は全部わかるようにした。このように『万葉花譜』は、「万葉植物図鑑」を兼ねて、『万葉集』を読む人また古典の花に興味や関心を持つ人の参考に供したいと考えている。ご利用いただければ幸いである。

なおこの『万葉花譜』に引用した例歌は、岩波版の日本古典文学大系『万葉集』全四巻を底本とした。これは、高木市之助、五味智英、大野晋という当代一流の万葉学者ないし国語学者の校注によるものだからである。



春



わらび

和良妣 蕨

ワラビ（うらばし科）

石^{いし}ばしる垂^{たれ}水^{みづ}の上のき蕨^{わらび}の萌^もえ出^でづる春^{はる}になり^{なり}にけるかも 志^し貴^き皇^み子^こ 卷^{まき}八^{はち}—一四^{じゅうし}—一八^{はち}）
 荒^あ涼^{りやう}の冬^{ふゆ}が尽^つきて花^{はな}が咲^さき、草^{くさ}木^きが萌^もえる春^{はる}を迎^{むか}えるのは楽^{たの}しいものである。「冬^{ふゆ}ごも
 り 春^{はる}さりくれば」（卷^{まき}一^{いち}—一六^{じゅうろく}）、「み冬^{ふゆ}つぎ 春^{はる}は来^きれど」（卷^{まき}一七^{じゅうしち}—三九^{さんじゅうきゅう}〇一^{いち}）とい
 った枕^{まくら}詞^{ことば}は、万^ま葉^{はつ}人^{にん}の冬^{ふゆ}からの解^と放^{はつ}を喜^{よろこ}び、あるいはそれ^{それ}を待^{まち}ちわびた自然^{しぜん}の声^{こゑ}でもあろ
 う。その喜^{よろこ}びの声^{こゑ}が聞^{きこ}えてくるのは、このワラビの歌である。

この歌は志^し貴^き皇^み子^こが何^{なん}かの機^は会^{かい}に春^{はる}浅^あい抵^{たい}津^つの垂^{たれ}水^{みづ}におもむかれて、岩^いの上^{のうへ}をほとばし
 り流^{なが}れる滝^{たき}の激^{げき}流^{りゅう}のほとりに萌^もえ出^でしはじめたき蕨^{わらび}の力^{ちから}のこもる拳^{こぶし}のような姿^{すがた}に、「き蕨^{わらび}
 が萌^もえ出^です春^{はる}にな^なったな」と、春^{はる}の来^き来^きを喜^{よろこ}ばれている歌と解^と釈^{しやく}される。

志^し貴^き皇^み子^こは天^{てん}智^ち天^{てん}皇^みの皇^み子^こで、すぐれた万^ま葉^{はつ}歌^か人^{にん}。題^{だい}名^なに「志^し貴^き皇^み子^この懽^{あつ}の御^ご歌^か一首^{いっしゅう}」
 とあるが、何^{なん}の喜^{よろこ}びかは不^ふ明^{めい}であるが、万^ま葉^{はつ}学^{がく}者^{しや}の間^まには、増^{ぞう}封^{ほう}あるいは位^ゐ階^{かい}昇^{しょう}進^{しん}の時^{とき}の
 作^{さく}かともいわれている。垂^{たれ}水^{みづ}については説^{せつ}があるが、これは今^{いま}の大^{だい}阪^{はん}府^ふ吹^ふ田^た市^し垂^{たれ}水^{みづ}の垂^{たれ}水^{みづ}
 神^{かみ}社^{しゃ}の辺^へりかと推^{おし}定^{さだ}められている。まことに明^{めい}朗^{らう}な調^{てう}子^しの満^{みち}ち満^{みち}ちた歌^{うた}で、春^{はる}浅^あい頃^{ころ}の垂^{たれ}水^{みづ}
 の丘^{かみ}が目^めに浮^うんでくる。

さてこのワラビは全^{ぜん}国^{こく}いたるところの山^{やま}野^のにみられる多^た年^{ねん}草^{そう}であるが、これが日本^{にっぽん}の文^{ぶん}
 献^{けん}にみえるはじめは、この『万^ま葉^{はつ}集^{しゅう}』である。『万^ま葉^{はつ}集^{しゅう}』にはこの歌一首しか現^{あら}われていな
 いが、万^ま葉^{はつ}人^{にん}には広^{ひろ}く知^しられていたものであろう。それは、上^{かみ}代^{しろ}からこの若^わ茎^きと根^ねを掘^ほって
 作^{つく}った蕨^{わらび}粉^{こな}が食^く用^{よう}として利^り用^{よう}されていたからで、『源^{げん}氏^し物^{ぶつ}語^ご』にも「早^さ蕨^{わらび}」の巻^{まき}があり、

此^この春^{はる}は誰^{たれ}にか見^みせんなき人^{ひと}のかたみにつめる峰^{みね}のさわらび

などの歌が載^のっているし、『延^{えん}喜^き式^{しき}』（平^{へい}安^{あん}初^し期^きの禁^{きん}中^{ちゅう}の年^{ねん}中^{ちゅう}儀^ぎ式^{しき}や制^{せい}度^どなどのことを漢^{かん}
 文^{ぶん}で記^きしたもの）には、この若^わ茎^きを塩^{しほ}漬^{づけ}にして貯^{たくわ}えていたことも記^きされている。

この蕨^{わらび}狩^{かり}は今^{いま}もつづいているわけ^{わけ}で、ワラビの語^ご源^{げん}も、ワラビのワ^わはカ^かラ（茎^き）に通^{とお}
 ずるので、茎^き芽^めから転^{てん}じたものとも、またワラビのビはア^あケ^けビと同じくミ（実^み）に通^{とお}じ、
 食^く用^{よう}にする茎^きの意^いともいわれている。

しかし春^{はる}のワラビも、やがてたけ高^{たか}くなり、葉^はも茂^{さか}り冬^{ふゆ}に枯^かれる。これをホド^ほド^どといった。
 春^{はる}くれば折^おれる人もなき早^さ蕨^{わらび}はいつかほ^ほどろにな^ならんとすらん（源^{げん}俊^{しゅん}頼^{たの}）

と古^こ歌^かにあるのもそれで、昔^{むかし}はこれを折^おり敷^しいて畳^{じよう}に代^かえたという。また、古^こ歌^かに「紫^{むら}
 の塵^{ちり}」とあるのは、紫^{むら}色^{しき}のワラビの芽^めの異^い称^{しょう}である。



あしび

馬酔木・馬酔・安之碑・安志妣

アセビ(つつじ科)

野山に若草が萌えはじめる頃になると、里にも春霞がたなびいて、春の訪れを知らせる。
ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つらしも

(巻八一―一八一二)

万葉人は目ざとくそれを感じている。こうして春が地上に行きわたろうとする頃、大和
地方の野山を飾るものはアシビの花であった。

万葉集にはこのアシビの歌が十首あるが、

河蝦鳴く吉野の川の滝の上の馬酔木の花ぞ地に置くなゆめ

(巻一〇―一八六八)

三諸は 人の守山 本辺は 馬酔木花咲き 末辺は 椿花咲く うらぐはし 山ぞ泣く

(巻一三―三三二二)

子 守る山……

という歌のごとく、吉野川畔にも、三諸の山にもアシビが咲き、これは庭にも植えられ
ていたことが、

鴛鴦の住む君がこの山斎今日見れば馬酔木の花も咲きにけるかも

御方王(巻二〇―四五一)

池水に影さへ見えて咲きにほふ馬酔木の花を袖に投入れな

大伴家持(巻二〇―四五一)

磯影の見ゆる池水照るまでに咲ける馬酔木の散らまく惜しも

甘南備伊賀真人(巻二〇―四五一三)

という三首の歌でもわかる。この三首は「山斎をみて作る歌三首」とあり、山斎とは庭
園のことである。「磯浜の見ゆる池水照るまでに」とあるのは赤い花が想像され、これは
アシビでなくボケかという説が行われたことがある。しかし「照る」「照らす」は必ずし
も赤い色に限るのでなく、これは光り輝くことである。

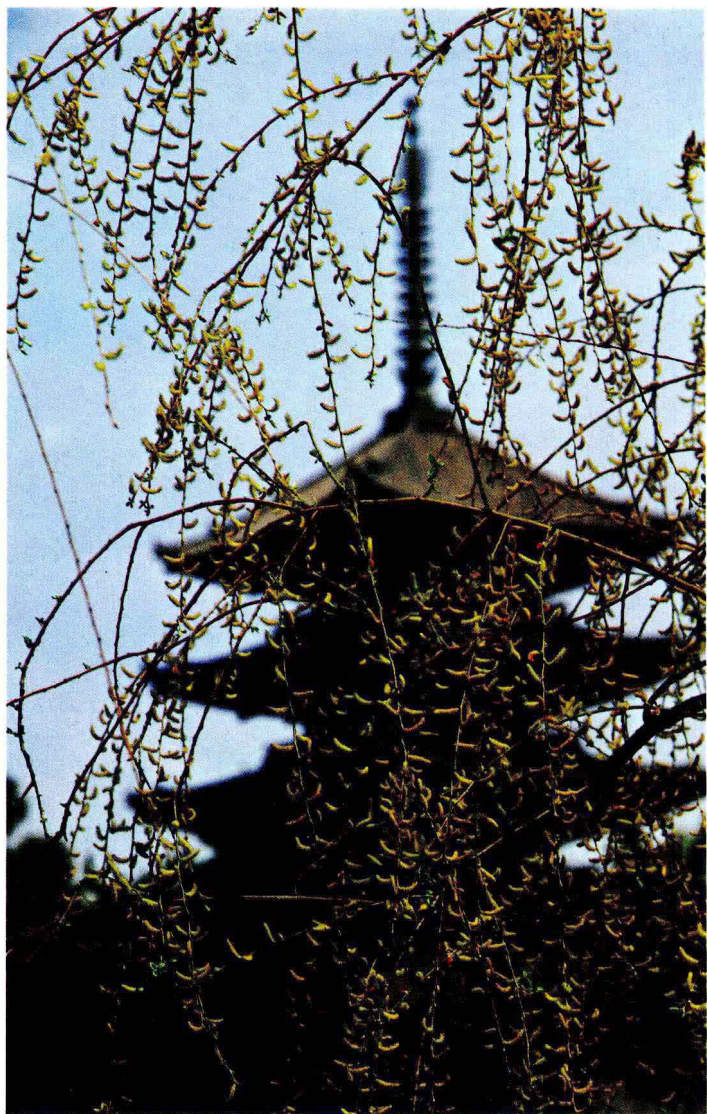
以上は貴族階級のアシビの観賞であるが、一般の万葉人もこの花を愛していたことは、
わが夫子にわが恋ふらくは奥山の馬酔木の花の今盛りなり

(巻一〇―一九〇三)

という歌でも知られる。私が私の夫に恋していることは、奥山のアシビの花が今ちよう
どまつ盛りであるようなもので、実に熱烈に恋しているという恋歌である。

万葉名アシビは今アセビと呼んでいるが、これにはアシビ、アシミ、アセボ、アセミ、
アセモ、アセブなど、地方によっていろいろの呼び名がある。馬が食べると、酔えること
くなるというので馬酔木の名があり、日本名のアシビは「足しびれ」の略かといわれる。





やなぎ

柳・楊・也奈宜・楊奈疑

シダレヤナギ（やなぎ科）

うち靡く春立ちぬらしわが門の柳の末に鶯鳴きつ

（巻二〇——一八一九）

浅緑染めかけたりと見るまでに春の柳は萌えにけるかも

（巻二〇——一八四七）

うちなびくヤナギや萌える青柳に春を感じたのは万葉人も同じことで、集中ヤナギとみえる歌が三十九首もある。『万葉集』のヤナギの歌をみると、ヤナギに柳と楊の二字を用いている。本草では柳はシダレヤナギ、楊はネコヤナギと区別しているが、万葉ではすべてシダレヤナギを指している。シダレヤナギは万葉時代にはもう今日と同じように街路樹に植えられていたが、春にはまたこれを「かずら」にして遊んでいたことが知られる。このかずらは延命を願うマジックであったが、万葉時代には装飾となったと西村真次氏は述べられている。なお、シダレヤナギの美しさはなんといっても青柳の細い枝の線で、万葉人はこれを「青柳の細き眉根」（巻一九——四一九二）とたたって美人の形容とした。

れきくや 三枝

ミツマタ（じんちようげ科）

世の人の 貴び願ふ 七種の（中略）夕になれば いざ寝よと 手を携り 父母も 上
はな下り 三枝の 中にを寝むと 愛しく……

春去ればまず三枝の幸くあらば後にも逢むな恋ひそ 吾妹

柿本人麻呂歌集（卷一〇——一八九五）

前の歌は憶良の子供が病にかかり、死んでしまったのを悲しんだ長歌で、全編これ愛と
悲痛の文学として有名である。また後の歌は、春が来るとまた咲くという名のサキクサの
ように、幸く、無事であったなら後にも逢うことができよう。だからそんなに恋しくばか
り思うなよ 吾が妹よ、といった歌である。この二首の歌にみられるように「三枝」は「中」
また「三つ」にかけている。このサキクサはミツマタを指したもので、枝が三本ずつに分
かれているので、『万葉集』の用字も「三枝」とある。早春葉に先立って黄色の花を開く。

